

「直言」

今、求められている覚悟

「家の光」(2015年3月号)において山下惣一氏が30有余年前のエピソードを紹介している。要約すれば、自動車販売会社社長からの“日本の農民は乞食である”という書き出しで始まる手紙に、“敗戦後日本の工業は寝食を忘れて技術開発を続け、世界に冠たる工業立国を成し遂げたが、その間農民は米価闘争や補助金に関わる物乞いに余念がなかった、故に乞食である”と書かれていた。これに対して氏は、“農民が乞食だとすれば、その乞食に車を売っているあなたは乞食に喰らいつくダニ。乞食はダニがいなくても生きていけるが、ダニは乞食がいなくて生きていけない。ダニの分際で大きなこと言うな!”と返したそうである。痛快ではあるが、悲しいかな今も農業軽視の構図は変わっていない。

この社長も好むであろう「強い農業」という表現も同根である。筆者はわが国の農業を少なくとも「弱い」と感じたことがないため、常々この表現に違和感を覚えてきた。この国に生まれ育って61年間、一度も飢餓の恐怖を感じたことがないことが唯一最大の理由であろう。「弱い」農業にできる芸当ではないはず。もし農業に強さを求めねばならないとするならば、「根強い」という言葉がもっとも相応しい。農村社会の基層領域にある各種の地域資源を用い、自然や地域コミュニティ、さらには伝統文化などと深いつながりを持ちながら生み出した農畜産物を国民の食生活に結びつけてゆく、その関係性に象徴される強さである。

しかし、「経済の進歩につれて、第一次産業から第二次産業へ、第二次産業から第三次産業へと、資本、労働力および所得の比重が増大してゆくという経験的法則」(ペティーの法則あるいはペティー・クラークの法則と呼ぶ)が教えるとおりに、生産要素は産業構造が高度化するにつれて、第一次産業から、第二次、第三次へと移転していく。このことには疑問を挟む余地はないものの、経済進歩の証として手放しで喜ぶわけにはいかない。なぜなら生産要素を供給し続ける産業は相対的劣位産業化するからである。そこに単なる「強さ」を求めるのは御門違いというもの。さらに、生産要素の他産業への野放図な移転を看過していたら、食料安全保障も多面的機能の発揮も保証の限りではない。国民を飢餓の恐怖に陥れない、国土を保全する、そして国内産業のバランスある構成と発展をめざすという政府の責任を果たすためには、「規制」による保護が不可欠となる。規制の重要度が高いほど岩盤とならざるをえない。岩盤規制はドリルで破壊する対象ではなく、まずは守る

岡山大学大学院 環境生命科学研究科 教授

小松 泰信

(本センター参与)



べき対象として認識されねばならない。岩盤の意味を取り違え、そこを拠点とする産業を抵抗勢力とラベリングし、ドリルで成敗する、と息巻く首相の言動は、国民国家を預かる者のものとは到底思えない。

さらに驚きを禁じ得ないのは、農林水産省までが官邸主導の動きに追従しているという事実である。それも、“省内において、今夏予定の幹部人事を念頭に、「菅氏の意に沿わなければ人事で報復される」(省幹部)との危機感が広がった”(読売新聞3月6日付)からだとするならば、与太者集団の因縁つけとしか思えない「農協改革」を猟官運動の手土産にする官僚はもとより、農林水産省そのものの存在意義が問われかねない自殺行為といえよう。

田代洋一氏は、勝手に銘打たれた「農協改革集中推進期間」を「5年戦争」の宣戦布告であり、今をその緒戦と位置づけ、ここで結束して踏ん張らないと後がない(農業協同組合新聞2月10日付)、と警鐘を乱打している。しかし、昨年12月の衆議院選挙における関係者の投票行動に失望した1人として、その警鐘がどこまで伝わるのか暗澹たる思いである。筆者の疑問に対して、「どうせ当選する組織や候補者に反対の意を表明したら後がこわい」ので「苦渋の決断」「オトナの対応」をした、という台詞が複数のルートで返ってきた。TPPやいわれなき「農協改革」の被害者が加害者の推薦、支持を表明し組織的に行動するというストックホルム症候群的行動は、たとえ生き残るための戦略だとしても、信頼と期待を寄せる人々を裏切るものであったことを忘れるべきではない。

もしこのような状況から脱出したいと関係者が心底思うなら、やるべきことは次の二つ。一つは、このような症状の治療法にならって、自分たちを見限った政党や監督官庁と共依存状態に陥っていることを自覚し、それらから距離を置き、これまでの経過や現状を客観的に総括し、刷り込まれてきた意識や感情から少しずつ抜け出せるようにしてゆくこと。もう一つは、成長社会ではなく成熟・定常型社会を見据え、現場感覚に満ちた食料・農業・農村のビジョンと政策を策定し、世に問うことである。

松陰語録になぞらえれば、今、関係者に求められている覚悟は次のようになるろう。

「己に真の志あれば、無志はおのずから引き去る。恐るるにたらず。」